

2015年5月17日主日礼拝

## 説教「聴くサムエル」

### サムエル記第一 3章 1-14節

#### 【神さまを知ること】

先週は、神さまに心を注ぎだして祈ったハンナの祈りから聴きました。ひとりの女性の悩みに、神さまは耳を傾けてくださり、願った以上のみわざをしてくださいました。それは、混乱の時代のイスラエルを導いたサムエルの誕生。

サムエルが神さまに仕えるようになったころ、イスラエルの祭司はエリとその二人の息子。「エリの息子たちは、よこしまな者で、【主】を知らず」(2:12)とあります。神さまに仕える祭司が、神さまを知らない暗い時代です。サムエルも、まだ神さまを知りませんでした。神さまを知らないというのは、生きているお方として神さまを知らないということ。神さまの名前は知っています。エリやエリの息子たちは人々のささげ物を神さまに献げるのを手伝ってもしました。けれども、神さまが生きておられることは知りませんでした。思いがけないときに、ご自分からサムエルを呼ばれるお方だとは知らなかったのです。

#### 【飼い慣らすことができない神さま】

英語にタイムという単語があります。「飼い慣らされた」という意味の言葉。ときどきお話しする「ナルニア物語」という児童文学の中では、イエス・キリストはライオンとして描かれ

ています。そのライオンが、しばしば、口にす言葉が「私はタイム・ライオンではない」。つまり神さまは、人間によって飼い慣らされるような神ではない、と言うのです。人間が用事があるときだけ呼び出して後はフタをしておけるような神さまではなく、ご自分で自由に生きておられる神さま。決して私たちが、自分に都合のよいうに飼い慣らすことができない神さまです。飼い慣らすことができない神さまは、安全ではありません。危険なのです。私たちが行きたくないところに行かせるかも知れないのです。でも神さまは、よいお方。私たちがやりたくないことであっても、実はそれは、私たちが思ってもみなかった、よいこと。最もよいことをしてくださる最もよいお方です。

サムエルはこの神さまに従いました。「お話してください。しもべは聞いております」(10)と申し上げ、聞いたとおりに生き始めたのです。

#### 【大人たちの幼稚な祈り】

ところがまわりの大人たちは、「【主】の契約の箱」(4:3)をかつぎだし、「それがわれわれの真ん中に来て、われわれを敵の手から救おう」と言います。この箱は神さまの臨在の象徴にすぎないのですが、箱を担ぎ出せば神さまに言うことを聞かせることができると考えているのです。神さまに従うのではなく、神さまを従わせる。神さまに仕えるのではなく、神さまに仕えさせようとしたのです。私たちも、生きてお

られる神さまとの交わり抜きに、神さまの力だけを利用しようとすることがあります。それは自分が神となることで、そこに偶像礼拝の本質があります。けれども神さまは私たちとの交わりを切に願っておられるのです。

#### 【神さまとともに】

イスラエルは戦いに敗れ、神の箱は奪われました。まったくの暗黒の時代です。その間もサムエルは、神さまに仕え続けました。どんなに少数派であっても、ときにはただひとりであっても、神さまとの交わりの中に生きたのです。「サムエルの生きている間、【主】の手がペリシテ人を防いでいた」(7:13)とあります。神さまはサムエルとの交わりのゆえに、イスラエルをお守りくださいました。

サムエルがそのように用いられたすべての始まりは、「お話してください。しもべは聞いております」(10)でした。あのときサムエルが聞いたのは、エリの家への厳しい裁きのみ言葉でした。サムエルはそこに、神さまの痛みを聞き取りました。神さまがどれほど心をお痛めになるお方か、そしてどれほど人を愛し続けるお方であるかを知ったのです。神さまを知った者だけが、神さまと共に生きることができます。祈りの中で、神さまを日ごとにますます知り、神さまとともに生きる私たち。そんな私たちは、神さまと共に痛みながら、この世界に自分を注ぎだして生きる生き方を、もう始めています。